

年間第 32 主日 マタイ 25 : 1~13

たとえ話の内容を考えます。婚礼の時に、若い娘たちが花嫁の家の前で、花婿の到着を待ちます。娘たちは、自分の役割を果たすように、早くからランプを灯して待っています。

けれども、花婿の到着が遅れます。「真夜中に」待ちに待った時が来ます。村の人たちが「花婿だ!」と喜び、娘たちの出番です。眠い目をこすりながら婚礼の支度をするはずでした。ところが、5人のおとめは、肝心のところで油が尽きて、目的を達成できません。他の5人は、念のために油を用意していたので、長く待たされましたが役割を果たすことができました。賢いおとめたちは、花婿と花嫁と一緒に婚宴の席に入って、そこで戸が締められます。

今日の福音では「婚宴の席に入ること」を「神の国」にたとえています。この話は、長い人生を象徴しています。人生のゴール・目的を目指す長い道のりのたとえです。

私たちは、地上で2つの命を生きます。死すべき命と永遠の命です。この世の命と神の子としての命です。(地上で) 肉体が備わっている時に、神の子の命を生きることを望んでいます。けれども、神の国を求める持続性がない(見失う)と永遠の命には与れません。

また、神の国は、この世の生(命)のうちには完成しないものもあります。神の国への営みは、死んだ後、私たちの手を離れても、永遠の命に向かって進みます。

「自分が何のために生きているのか?」 私たちは漠然と意識はしています。10人のおとめも、全員、花婿を迎えに出ていきます。けれども、人生は長い。皆、適当に生きてポックリ死のうとは思ってない。生きている間に、新しい事態が次々に展開していきます。そのうちに、ある人は、自分が何のために生きているのか忘れてしまう。刹那的な生き方になってしまう。本当に大事なもののじゃなくて、別のことにとらわれてしまう。洗礼を受けたときの輝きが薄れて、永遠の命への熱意が持てなくなることもあります。

人生は、短距離競走ではありません。いつも同じテンションを保つこともできません。紆余曲折があって、考え方がわかることもあります。でも、人生の目的は同じです。

今日の福音にある「賢いおとめ」と「愚かなおとめ」の違いは、生きる目的をしっかりと持っていたのか? 見失わなかったのか? の違いです。生きる目的を保ち続ける「賢さ」がテーマです。それが鈍くなって流されてしまうのが「愚かさ」です。

このたとえ話には、油を切らしたおとめたちが、「分けて下さい」と頼んで断られるシーンがあります。「店に行って、自分の分を買って来なさい」とあります。「ケチケチせずに、分けてあげたらいいのに」と思う人もいるかもしれません。でも、話の要点は、油の貸し借りではありません。人には貸し借りできるものと、できないものがあります。生きる目的は、人に貸したりはできません。自分で探して保ち続けなければなりません。一人一人が自分で考えて、見失わないように、追い求め続けなければなりません。

私にとっての生きる目的は、イグナチオの霊操 23 番の“原理と基礎”(冒頭)です。

「人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうすることによって、自分の霊魂を救うためである。」 一人一人が、生きる目的を簡潔にまとめて、それを心に刻んで、長い人生を歩んでいきましょう。